

新たなモビリティサービスと 日常生活についての考察

大野 沙知子¹

¹正会員 名古屋大学未来社会創造機構 (〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町)
E-mail:sachi_ono@coi.nagoya-u.ac.jp

本研究は新たなモビリティ・サービスと日常生活の関係を議論することが目的であり、本稿では現象学的社会学で議論されている日常生活の世界に関する文献整理から、新たなモビリティ・サービスの解釈を試みる。具体的には、Alfred Schützの日常生活の世界ならびに多元的現実の概念を用いて、自動運転の①移動手段の側面、②空間の側面から、日常生活の解釈ならびに他者関係の変容について検討する。

Key Words : *lifeworld, Alfred Schütz, mobility service*

1. はじめに

筆者はこれまで、自動運転ならびにそれを支える技術などの新たなモビリティ・サービスを地域社会で実装するための仕組みを構築するために、地域住民や地域社会にどのように技術や仕組みが取り入れられるかについて考察してきた¹⁾²⁾。その中で、新たなモビリティ・サービスとは何であり、自動運転の実現により日常生活がどのように変更されるのかについて説明できていないことを問題意識としてもっている。本研究は新たなモビリティ・サービスと日常生活の関係を議論することが目的であり、本稿では現象学的社会学で議論されている日常生活の世界に関する文献整理から、新たなモビリティ・サービスの解釈を試みる。

本稿の構成は以下の通りである。まず、Alfred Schützの論文から日常生活の世界ならびに多元的現実について概略を示す。次に、現在の（インターネットや仮想現実により変更された）日常生活の世界について論文を整理し、日常生活の世界について解釈を深める。そのうえで、自動運転や周辺の技術など新たなモビリティサービスの社会実装による日常生活の世界について議論する。なお、本稿では新たなモビリティ・サービスを自動運転とし、移動手段の側面と空間の側面から捉えている。

2. Alfred Schützの日常生活の世界

本章では、はじめにAlfred Schützによる日常生活の世界ならびに多元的現実について説明する。次に、新たなモビリティ・サービスにおける日常生活を議論するための視点として、他者関係に関する内容を整理する。なお、Schützは、現象学的社会学の創始者であり、現象学的社会学では、日常生活とはいかにして構成されるかが主要なテーマである。

(1) 日常生活の世界の定義

Schützは多元的現実の著書³⁾において「日常生活の世界」を、私たちの誕生のずっと前に存在し、組織化された世界として私たちの前任者である他者によって経験され解釈された主観間の世界を意味すると説明する。Schützは、私たちは日常生活の世界に加え、夢や空想、宗教や科学技術を意味領域とし、意味領域を含む多元的現実 (multiple reality) の中で生きており、日常生活の世界は最重要の現実 (paramount reality) として現れるとする。そして、認知様式として6つ (1.特有の意識の緊張、2.特有のエポケ、3.特有の自生性、4.特有の自己経験の形式、5.特有の社会性の形式、6.時間パースペクティブ) を提示し、日常生活の世界と意味領域を区別する。日常生活の世界から他の意味領域へは飛躍 (leap) を伴い、アクセントを移行させることでそれぞれの意味領域を現実の世界ととらえることを説明する。多元的現実における意味領域のアイデアや日常生活の世界と他の意味領

域との関係は、現在の日常生活の世界を分析するために用いられている。

(2) 他者関係の整理

Schützの日常生活の世界において、他者関係は、認知様式の1つである特有の社会性の形式、あるいはwe-relationの考えがある。日常生活の世界は、主観間の世界であるが、私の私的なものではなく、私たち全員に共通しているとし、多元的現実の認知様式の1つとして提示する「特有の社会性の形式」では、コミュニケーションと社会的行動においてそれぞれに基づく相互主観性を説明する。

対面状況において、互いに相手を意識している関係をwe-relationと呼ぶ^[4]。このwe-relationにおいて「意識の流れの同時性」と「空間的な直接性」から説明する。つまりSchützの日常生活の世界においては私と他者が時間と空間を共有することが前提である。対面状況は他者の意識が相互的な場合のみならず一方的な場合もあり、私が相手を志向的に意識している場合においては、汝志向と呼称される。汝志向は、私が他者を生きた人間として、意識的に判断するよりも前にとらえることであり他者の主観を把握するものではないとする。つまり、他者が純粹にそこに存在することを意味している。

他者関係に関する項目は、他者の種類（仲間と同時代人）など、多数あり説明される。現在の日常生活において、どのような他者関係が新たに生まれたか、その結果として日常生活の世界がどのように変更されたかを分析する。

3. 現在の日常生活の世界

Schützの日常生活の世界の解釈を深めるために、現在の日常生活の世界について、関連する論文を整理する。インターネットやビデオゲーム、仮想現実などの技術による日常生活の世界の変容について考察されている。

(1) 日常生活の世界の変容

日常生活の世界の変容を取り上げる論文では、インターネットや仮想現実などの技術が人々に利用されることで、日常生活の世界が拡張したか^[5]^[6]、新たな日常生活の世界が創出されているか^[7]^[8]^[9]、あるいは夢や空想の意味領域のように新たな意味領域^[10]^[11]が創出されているかを考察する。Marcelo Vietaのように日常生活の世界と仮想現実の世界は違いがないとし日常生活の世界の拡張を主張する立場^[6]もあれば、Rebecca A. Hardesty & Benjamin Sheredosのように日常生活の世界が複数化すると主張する立場^[8]もある。高艸は、ビデオゲームの世界は多元

的現実を構成する意味領域の1つとし、最重要の現実である日常生活の世界とは区別する。そのうえで、仮想現実においては2つの領域に属する対象が同時に現前することを指摘する^[10]。いずれの立場においても、インターネットや仮想現実の世界を二分化するのではなく、関連性を指摘し^[7]、現在の日常生活の世界の解釈が行われている。

(2) 他者関係の変容

コミュニケーションならびにその基盤になる他者関係はどのように変更があるのか、インターネットや仮想現実により、空間を介した他者関係の変容が議論されている。仮想社会においてDenisa Butnaruは空間原理に規定された他者関係が変更され、技術に媒介され経験が共有されることを考察する^[7]。Rebecca A. Hardesty & Benjamin Sheredosも同様に、空間的近接性が現在の日常生活の世界では成り立たないことを指摘し、定義の変更を主張する^[8]。Marcelo Vietaは、オンライン上では弱いwe-relationで他者関係が構築され、日常生活の世界（オンライン）における深いwe-relationと区別する。その他として、匿名性をもった個人が親密な関係を築くことから新たな他者の存在（consociated contemporary）^[9]について、知識保有の有無による限定的な他者関係^[10]についての視点も考察されている。

4. 新たなモビリティサービスによる日常世界

ここでは、Schützの概念を用いて、新たなモビリティ・サービスについて分析する。新たなモビリティ・サービスは自動運転とし、サービスの具体として①移動手段の側面、②空間の側面を取り上げる。移動手段の側面としては自動運転車内でドライバーは運転行為から解放されることを意味し、空間の側面としては運転行為から解放された結果、多様な活動が可能になること^[12]や自動運転車内の実行可能な活動には身支度や運動・ストレッチなど日常生活の活動が持ち込まれること^[13]から、多目的移動空間として利用されることを意味している。新たなモビリティサービスは、インターネットや仮想現実のようにシュッツの日常生活の世界の枠組みから考察が可能であるかは、今後の技術開発や地域住民の生活の変容を丁寧に記録することが必要である。このことに留意したうえで、(1)日常生活の世界、(2)他者関係の視点について検討する。

(1) 日常生活の世界

Schützの多元的現実の整理から、矢谷は、ながら行為について考察する^[14]。ながら行為として、自転車に乗

りながら歌を歌うことを具体例としてあげ、日常生活の世界に属する行為と音楽的世界に属する2つの現実が統合される、あるいは同時遂行されることを指摘する。自動運転の移動手段の側面に目を向けると、ハンドルをもって運転をするという行為と同時遂行できるのは音楽やラジオを聴くことであるという行動の制限が緩和される。その結果、移動を含む日常生活の世界と2つあるいは複数の意味領域が同時遂行されることが可能となる。従来の移動行為では移動が属する領域にアクセントが置かれるが、車内行動の制限が緩和され複数の意味領域が統合されることで、歌をうたいながら移動するように、主従関係が変更されることも推察される。

空間の視点では、移動を含む日常生活の世界と車内での多様な行為を含む意味領域は分離されることが指摘できる。つまり、日常生活の世界から他の意味領域に飛躍が生じることを意味する。個人においては車内空間での行為にアクセントが意向し、移動行為についての意識が薄れる。ここにおいては、実際には移動行為と車内での行為は同時遂行されていることから、見せかけの飛躍と呼ぶことができる。

(2) 他者関係の変容

移動手段の側面と空間の側面での日常生活の世界の違いから生じる他者関係について検討する。

移動手段の側面において、日常生活の世界と他の意味領域の統合や同時遂行されるとはいえ、自分ではない何かは運転し目的地まで連れていくことを考えると、公共交通利用時と他者関係は変更がないものといえる。自動運転の場合に特徴であることは運転行為からの解放であり、他者がそこに存在するという意識に変更をもたらす。私たちは他者と時間と空間を共有して認識から、運転行為において他者の存在を前提とし加減速をすることや道を譲り合う。車車間通信あるいはダイナミックマップの利用による合流調停においては他者との細かいやりとりを技術が支援する。その結果、私の手の届く範囲にいる他者の存在を志向的に意識する汝志向が希薄になることが指摘できる。また、直接的に他者の存在を意識するのではなく、技術的に媒介された他者関係が構築されることとなる。

空間の視点では、車内での行為にアクセントが置かれる。車内行為の種類によるが、ICT技術を利用して車外の他者につながることや家や職場での活動を持ち込むことが可能となり^[15]、その結果、移動行為中において、時間と空間から私の位置が規定されるが、空間の共有や空間的接近性を必要とする他者関係の必要性は失われ、時間を共有する仲間とのコミュニケーションが強化されると考えることができる。

5. おわりに

本稿では、新たなモビリティ・サービスについて、日常生活との関係を議論したく、その手がかりとして Alfred Schütz を取り上げた。今回は日常生活の世界と他者関係に着目して考察した。新たなモビリティ・サービスが日常生活に広く影響を与えるかを考察するためには更なる分析が必要であり、Schütz の概念からは、now and here などの時空間の視点^[9]、新たな他者の存在の視点^[16]について議論することが可能である。また、新たなモビリティ・サービスの利用により複数の意味領域が統合あるいは同時遂行されるのであれば、Schütz の認知様式の1つである特有の自己経験の形式の変更が指摘できる。本稿では、Schütz の日常生活の世界を取り上げたが、日常生活の中でより私たちの生活に即した新たなモビリティ・サービスの意味や影響を把握するためには、24時間の使い方の調査や自動運転車内に持ち込まれる生活行動などの分析が必要である。

謝辞：本研究は、日本学術振興会（JSPS）科学研究費・若手研究「自動運転の社会的形成に関する分析とまちづくり手法の提案」（課題番号：20K14846、研究代表者：大野沙知子）の成果の一部です。

参考文献

- [1] 大野沙知子, 手嶋茂晴: 地域活動に着目した社会実験の展開に関する考察., 第 59 回土木計画学研究発表会・講演集, 2019.
- [2] 大野沙知子, 稲葉久之, 金森亮, 森川高行: 質的データに基づく新たなモビリティ・サービスの利用意向プロセスの分析—高蔵寺 NT のモビリティ・ブレンドの実証実験を通じて—, 公益社団法人日本都市計画学会都市計画報告集, No.19, pp.330-pp.337, 2020.
- [3] Alfred Schuetz: On Multiple Realities, Philosophy and Phenomenological Research, Vol.5, No. 4, pp.533-576, 1945.
- [4] アルフレッド・シュッツ (著), 森川真規雄, 浜日出夫 (訳): 現象学的社会学, 紀伊国屋書店, 1980.
- [5] O.I.Ollinaho : Virtualization of the life-world, Human Studies vol.41, pp.193-p.209, 2018.
- [6] Marcelo Vieta: Rethinking Life Online: The Interactional Self as a Theory for Internet-Mediated Communication, Iowa Journal of Communication, 2005.
- [7] Denisa Butnaru: Phenomenological Alternatives of the Life-world: Between Multiple Realities and Virtual Realities, Società Mutamento Politica, Vol.6, NO.12, pp.67-pp.80, 2015.
- [8] Rebecca A. Hardesty & Benjamin Sheredos: Being Together, Worlds Apart: A Virtual-Worldly Phenomenology, Human Studies, Vol.42, No.3, pp.343-pp.370, 2019.
- [9] Shanyang Zhao: The Internet and the Transformation of the

Reality of Everyday Life : Toward a New Analytic Stance in Sociology:Sociological Inquiry, Vol.76, No. 4, pp.458-pp.474,2006.

- [10] 高艸賢：意味領域の交錯と技術-シュッツの多元的現実論の応用，第92回日本社会学会大会，2019.
- [11] 成田康昭：インターネットに媒介された「現実の社会的構成」，応用社会学研究，No.57,pp.47-67，2015.
- [12] 小松崎 諒子，御手洗 陽，谷口 守：自動運転化でドライバーは何をするのかーその意向と要因の構造ー，第61回土木計画学研究発表会・講演集，2020.
- [13] 藤原章正，力石真，角城竜正：自動運転車が都市構造を変える？，自動車交通研究 環境と政策 2019，pp.18-19，2019.

- [14] 矢谷慈國：生活世界の社会学，追手門学院大学人間学部紀要，No.5，pp.61-pp.78. 1997.
- [15] 太田勝敏：自動運転車時代の交通とその社会，IATSS Review，Vol.40.No.2，pp.65-71，2015.
- [16] Shanyang Zhao :Consociated Contemporaries as an Emergent Realm of the Lifeworld:Extending Schutz's Phenomenological Analysis to Cyberspace,Human studies,vol.27, pp91-pp105,2004.

A CONSIDERATION OF LIFE-WORLD ON NEW MOBILITY SERVICES

Sachiko ONO

The purpose of this study is to discuss the relationship between new mobility services and daily life. For this purpose, I examine new mobility services from the literature on the lifeworld in phenomenological sociology. Reviewing Schutz's lifeworld and multiple reality, I consider about how change our daily life and relationship between me and other in the age of autonomous car. I especially focus on (1) aspects of a means of transportation in autonomous car and (2) aspects of a multipurpose space.